

がある。「みさつくし」は航路の輻湊する所に必要なものである。即ち港には必要である。「みをつくし」が「すみのえ」と共に詠まれるのは「すみのえ」が入江であり、港であるからである。「すみよし」とは詠みあわせる理由はないのである。

以上に述べてきた所で、「すみのえ」と「すみよし」との区別は明白である。内容が全く別のものであることも明白である。

(以下次号)

本稿は、平成三年八月に亡くなられた奥村恒哉教授の未発表原稿である。もともと本稿は某誌に投稿されていたものであるが、某誌の事情で全ての原稿が返却されることになった、その時に、御遺族の許に返されたものと聞く。ところで、本年二月には故教授が計画されていた『歌枕考』がようやく刊行された。しかし、この御遺著は途中で既発表の論文で纏めるということになった為に、本稿はこれから漏れてしまったのである。本稿は故教授が片桐洋一氏の意見を批判しながら、「すみのえ」と「すみよし」についての御見解を述べられたものである。歌枕研究の第一人者であられた故教授の面目の躍如とした御論考で、時は経ってしまったが、論は少しも色褪せていない。本学文科の御同僚であり、共に専攻の主任として仕事をされた門田明教授の退官記念号を編む時に、本稿が筆者の手に届いたものしかるべき縁であろうかと思ひながら、本稿を本誌に推薦するものである。都合で二回に分けることになったが、故教授が了とせられんことを。

橋口晋作

拾玉集四〇三四

暮の秋すみのえどののいけにきて波まの月に心すましつ

がある。『大日本地名辞書』の「墨江津」の項に

さみだれの住の江殿に日をふれば海よりかよふ池のしらなみ(拾玉集)

がある。これと同形の作は手もとの『拾玉集』には見当たらない。

四〇一九

五月雨に尚住の江に日をふれば海より池に通ふ白波

この作などの異形か。

右の作を通覧すると、「池」は「住之江殿」の「池」のことと了解される。住之江殿は住吉大社の神主家津守氏の居館である。広大なものであったようであるが、現在は姿を消してしまった。南北朝のころ、後村上天皇の行在所が住之江殿の内におかれた。行在所は正印殿と言う。『住吉大社』(学生社日本の神社11、住吉大社宮司西本泰著、昭和五十二年五月刊)には、その現況について、

正印殿はすでになく、広大な敷地は明治の初めより私人の有に帰して永く荒廃した高台と化していたが、いつか周囲は住宅が建ち並び、約百六十坪を現在社有として、国の史蹟に指定されている。中央上段の

間と思しきあたりに土壇を築き、「後村上天皇行宮正印殿址」と彫った石標がわずかに往時を偲ふよすがとなっている。

と記す。「住之江殿」の位置は見当がつくのである。問題になった「池」は「住之江殿」の池だから「すみのえの池」なのである。居館は以上の位置であると、右にいろいろ考えてきた「すみの江」と接することになる。そのために「すみの江殿」と呼称されたのであろう。前掲の『拾玉集』四〇二九にも「海より池に通ふ白波」とあることでわかる。

なお、その他に「すみのえ」に固有に詠みあわせられて「すみよし」とは詠みあわせられないものがある。右に『土佐日記』の文章について考えた箇所であつた「みをつくし」である。その時には『新古今集』巻十八、一七九一を掲げたが、『平安和歌歌枕地名索引』によると、

中宮上総集四〇散木奇歌集一〇九〇

かずならでよにすみのえのみをつくしいつをまつともなきよなりけり

右の作『新古今集』と同じ。但し、『散木奇歌集』では第五句「なき身なりけり」

中宮上総集五、散木奇歌集一〇九一

なかれてもあふ名はたたしすみのえの身をつくしにてくちはてななん

第二句『散木奇歌集』あふ名はたてし

第五句『散木奇歌集』くちははつとも

この作の場合も「山城国にある淀」の意である。類似の表現の例は多い。このことを念頭に、右の片桐氏掲出の語を検討する。

「里」は地名ではないが、「住吉郡にある里」の意である。入江の「すみの江」にある里では意をなさない。「里」は「すみよしの里」でなければならず、「すみの江の里」が無いのは当然である。

「すみよしの神」はあるが、「すみのえの神」は無いに等しい。と言われるが、これは具体的には「住吉大社」のことである。歌意としては「住吉郡に鎮座する神」と理解されるのである。これは、『延喜式』の神名帳、撰津国、住吉郡に

住吉坐神社四坐

とあるのはまさにその意味である。

次に、掲出された地名を検討しよう。そのうちの「すみよしのならしの岡」だけは不明とせねばならない。「ならしの岡」は通常大和国の歌枕とされる。初出は『万葉集』で、その巻八・一四六六である。しかし、撰津国住吉郡の中に「ならしの岡」とみとめられる場所は不明とせねばならない。外の地名では「長居の浦」が『古今集』初出で、疑いもなく住吉郡である。他は『万葉集』初出で、全てが住吉郡内の地名である。

これらは前掲の『住吉大社神代記』に記された「墨江」の位置、及び『歌枕』で想定した「すみの江」の位置（二者は完全に一致している。）から見

ると、いずれも住吉郡内ではあるが、かなり遠いところにある地点である。実際の詠作にあたって「すみのえ」と詠みあわせることは無理である。この「すみよしの」を冠した地名は、それを「すみのえの」とおきかえるのは不可能なものばかりである。

「すみのえの浅沢小野」は「すみのえ」に固有に詠みあわせられる地名として例示されているが、これは「すみよしの浅沢小野」もある（『歌枕』『平安和歌地名索引』参照）、即ち、「浅沢小野」は「すみのえ」でも「すみよし」でも、いづれを冠しても通用するので、外のものとの趣が異なるので説明を要する。

「浅沢小野」については拙著『歌枕』にも一章を設けた。退水して現在は平地であるが、その昔は「すみの江」の故地であったと考えられる。すると「すみの江の浅沢小野」であって当然であるし、もとより住吉郡でもあるから「すみよしの浅沢小野」であっても自然に通用する。

「すみのえ」とのみ詠みあわせられるものとして「池」があげられている。この「池」は何処にあるのか、何故「すみのえ」とのみ、詠みあわせられるのか、ということが当面の問題になる。『平安朝和歌歌枕地名索引』を見ると、

拾玉集 続国歌大観四〇三四

あつさをば松の嵐にをさめおきて秋をうかぶるすみのえの池

しの里」は数多いが「すみのえの里」はない。きた「すみよしの浅香の浦」「すみよしの敷津の浦」「すみよしの津守の浦」「すみよしの長居の浦」「すみよしの遠里小野」「すみよしのならしの岡」などの例があるのに対し、「すみのえ」の場合は「すみのえの浅沢小野」「すみのえの池」など、ごく少数であることを思えば、「すみよし」は郡名か里名であつて、「すみのえ」は文字通り「江」であるという把握は一般になされていたといつてよいようである。

しかし、奥村氏のように、両者のよまれ方に「明白な区別がとられている」とまでいい切つてよいかどうか、私には疑問がある。

ここには「すみよし」に固有に詠みあわせられた語、「すみのえ」に固有に詠みあわせられた語がそれぞれ掲出されている。ただそうなった理由については記されていない。平面的に列举されただけである。詠みあわせる語が異なるのは「すみのえ」「すみよし」の両語の内容が異なるからで、両語が同一のものではあり得ないことを示すものである。それぞれの語の内容はそのちがい方のうちにあらわれる筈である。それで、氏は

「すみよし」は郡名・里名であつて、「すみのえ」は文字通り「江」であるという把握は一般になされていたといつてよいようである。

と、記されている。これは筆者の見解を部分的に承認されたことではある。

しかし、氏は続けて「明白な区別がとられている、とまでいい切つてよいかどうか、私には疑問である。」と述べられた。筆者の見解は、氏の部分的な賛同を得たが、全面的な賛意は得られなかったのである。もう少し筆者の見解を詳しく述べることにする。

今の場合、ここに掲出された語は「里」・「池」・「社」を除き、他は全て地名であることがまず注意されることである。又、その地名も『万葉集』共通のものが多く、あらかじめ注意しておく必要がある。

この場合の表現として、例えば「すみよしの浅香浦」という表現は、「すみよし」という場所（土地）にある浅香浦の意である。「すみよし」という土地とは具体的に言えば「住吉郡」という意味である。それは『古今集』卷第十三、恋歌三、六六四の

題しらず よみ人しらず

山しなの音羽の山の音にだに人の知るべくわがこひめかも

歌意は山科にある音羽の山、の意である。又、『古今集』卷第十五、恋歌五、七番の

題しらず よみ人しらず

山城の淀のわかこもかりにたにこぬ人たのむ我ぞはかなき

類を「知的判断」とされた、という点である。そう言われる片桐氏の意味は、分類すること自体が既に知的判断であるが、この場合の片桐氏の意味は、歌学書の分類は原初的なものではない、即ち、事実に基づくものではなく、後世からなされた解釈だという認識である。

そういう事実に基づかない「知的判断」を筆者が「和歌の実例にあたつて説明しようとした」のだ、というのが片桐氏の拙論への理解である。当然それは大した意味のない作業をしたものだ、という判断が含まれている。筆者はそうには考えなかった。宙に浮いた「知的判断」かどうかは検証すればわかることである。又、そういうことを問題にする必要もない。問題の中心は、「すみのえ」「すみよし」の両語の関係について、不透明な従来の解釈を是正できるか、どうか、ということだからである。

歌学書の判断基準がものたりぬものだとなれば、それはそれで説明が必要であろうし、筆者はそうは感じなかった、ということである。

ただ今の場合、実際問題として、歌学書は丁寧に證歌を集めて判断を下していると思う。『五代集歌枕』の「すみのえ」は二十三首もの證歌を掲出している。『八雲御抄』なども注記は簡単であるが、出典がわかるように、細かな配慮が施されている。ただ今の場合、歌学書はよく整理された事実に基づいていると考える。

片桐氏は前掲の記述につづけて以下のように述べておられる。ここからが氏の本論になる。御意見は前半と後半とに分れる。前半は「すみのえ」と「すみよし」のそれぞれに固有に詠みあわせられた語をあげて両者に差

のあることを述べて、筆者の見解を部分的に肯定された上で、

しかし、奥村氏のように両者のよまれ方に『明白な区別がとられている、』とまでいい切つてよいかどうか、私には疑問である。

とされる。後半には「すみのえ」「すみよし」の両者に共通して詠みあわせられる語（和歌の景物）をあげて

実際に和歌によまれる場合は、共通したよみ方になる方が実ははるかに多かったのであり、両者に「明白な区別がなされていた」とまではいいにくいのである。

と氏の議論をしめくくつておられる。

四、片桐氏の論、その前半

前掲の文章からつづけて

ひめ松の会編の『平安和歌歌枕地名索引』（昭和四十七年。大学堂書店刊）には「すみのえ」「すみよし」をよみ込んだおびただしい数の例歌があげられているが、たとえば「すみよしの神」はあるが、「すみのえの神」はないに等しい（『兼盛集』に一例のみある）。また「すみよ

と、氏の論をはじめられる。ここであかがわれる氏の立場は、氏の所謂「通説」なるものと同じであり、それは前記した金子元臣氏の注と同じものである。

氏はまた筆者が「通説」に異を唱えたとも言われるが、そのことについて、どの点にどういう風に「異を唱えた」と理解されているのか、よくわからない。氏の所謂「通説」とするものの実体は『万葉集』の注釈は『万葉集』の注釈家が「住吉」の語について下している説明である。それは『仙覚抄』や『代匠記』の見解、及びその継承としての万葉学の伝統的見解であつて、『古今集』その他の平安朝文学の注釈家が、それをそのまま『古今集』及び、平安朝文学の注釈に転用しているのである。そういう転用はあり得べき事ではない。筆者が問題にしたのはこの点である。

『万葉集』の注釈で「住吉」を「スミノエ」とよむべしという説は『仙覚抄』にあらわれ、以降、論據を追加しながら現在に到っている。その総合又は完成された形は、澤瀉久孝先生の『万葉集注釈』である。その巻一の六五

霞打つ 安良礼松原 住吉 弟日娘子と 見れど飽かぬかも

の注に

住吉——住吉は「須美之延」(廿・四四〇八)、「須美之江」(廿・四四

五七)、「墨江」(七・一一四四)などによつてスミノエと訓むべき事が知られる。「吉」はエシともエとも訓まれたので、日吉神社もとヒエであつたのが、ヒヨシとなつたやうに、スミノエも平安朝以後はスミヨシとなつたのであるが、文字に惹かれて「墨江」(今は更に住之江の町名となつた)と住吉の二つの地名が今日まで残るに至つた——眞土(五五)が紀州の眞土と大和の待乳となつたやうに——のである。今大阪市住吉区住吉神社を中心としたそのあたり一帯の地である。

『万葉集』の「住吉」の説明は以上の通りである。この説明が『古今集』の「すみのえ」「すみよし」の両語の説明にそのまま転用されていたのである。当然「すみのえ」「すみよし」の区別は見失われてしまうのである。混乱の原因はこの「転用」にあつた。

ここで、『万葉集』におけるこの両語の説明は完全なものであつたか、という問題になるが、これは当面すすめてきた議論とはやや筋道が異なる問題になる。しかし、基本的には『万葉集』とのかかわりなしに、そもそも本稿ですすめている議論はなりたたない。「すみのえ」と「すみよし」の両語の問題は『万葉集』から勅撰集にまで通じる一つの問題である。『万葉集』の「住吉」はそういう意味で説明されねば完全な説明とは言えないと考える。(後述——第六章「万葉集とのかかわり」参照)。もう少し片桐氏の異見を聞いてから考える。

まず、前掲の片桐氏の文章のうち注意せねばならない点は、歌学書の分

であろう。

『新古今集』卷第十八、雑歌下・一七八一

題しらず

俊頼朝臣

数ならじ世に住の江の滯標いつをまつともなき身なりけり

と例がある。「すみのえ」には、疑いもなく、「みをつくし」が存在するのである。

以上が拙論の概略である。

三、片桐氏の異見提示

拙稿は「すみのえ」が入江で、「すみよし」が郡名で、全く異なる内容だ、という見解である。だから、同一の文学作品の内部に併存して使用されるのである。

ところが、片桐洋一氏は異見を出された。『歌枕歌ことば辞典』（角川小辞典35、昭和五十八年十二月刊）においてである。そこでは「すみのえ」【墨江】と「すみよし」【住吉】と併記して同一項目に収められた。即ち、同語として扱われたのである。その問題提起の部分に次のように記されている。

大阪市住吉区の一帯（今は住吉区のほかに住之江区もあるが、そのほとんどは埋立地である）。昔は住吉神社のすぐ近くまで海であった。『万

葉集』は「すみのえ」を「須美乃延」「須美乃江」「墨江」「墨之江」などと表記しているが、「住吉」と表記した二十九例も、「吉」は「エシ」「エ」とよまれたがゆえに同じく「スミノエ」を真名に表記したものであり、要するに本来は「スミノエ」であったものが「住吉」という字をあてたために「スミヨシ」ともよむようになり、「スミヨシ」という地名を作ってしまったというのが通説である。

この通説に対して、「発生論ではなく、平安期の使用の状態」のみを見ると、両者は「明白な区別がとられている」と異を唱えたのが奥村恒哉氏である（平凡社撰書52『歌枕』）。奥村氏は『八雲御抄』『五代歌枕』などが「すみのえ」を「江」の項目に「すみよし」を「社」「浦」「里」の項目に分類していることをもって、これが平安時代から鎌倉時代にかけての一般的な理解であり、両者は「決して同義語ではなく」「明白な区別」がなされていると主張され、それを『古今集』をはじめとする平安時代の和歌の実例にあたって証明しようとされたのである。「すみよし」が『伊勢物語』第六十八段に「すみよしの郡すみよしの里すみよしの浜をゆく」とあることから見ても、早くから郡や里の名として用いられていたことが知られるのに対して、「すみのえ」の「え」が「江」から発したものであろうことも容易に想像できる。だから『八雲御抄』や『五代歌枕』の編者が歌枕を分類するにあたって前述のような知的判断を行ったとしても当然である。また実作にあたって、当然そのような意識ははたらいっていたことであろう。

思う。ここで想定した位置は『住吉大社神代記』に、

齋垣イミガキの内の四至東を限る□道。南を限る、墨江スミノエ。西を限る海棹の及ぶ限り。北を限る住道郷

とあるのに一致する。又、これは『土佐日記』の記述とも照応する。承平五年二月五日の條に、

またすみよしのわたりをこぎゆく。あるひとの

いまみてぞ　みをばしりぬる　すみのえの　まつよりききに　われ
はへにけり

ここにむかしへびとののはは　ひとひかたときもわすれねばよめる

すみのえに　ふねさしよせよ　わすれぐさ　しるしありやと　つみ

てゆくべく

となむ（中略）

六日　みをつくしのもとよりいでて、なにはにつきて、かはじりにいる。みなひとびと、おむなおきな、ひたひにてをあててよろこぶこと、かぎりなし。

（本文は、萩谷朴『土佐日記全注釈』・角川書店、昭和四十二年八月刊、による。）

右、紀貫之の一行が和泉国の海岸に沿って「かはじり」を目指して航行している場面である。この部分に「すみのえ」「すみよし」の語が各二回使われている。従来の説（片桐氏の説も含む）の如く「すみのえ」「すみよし」同語論をとれば、我々は注釈に窮してしまう。『土佐日記』のこの部分、同語論では説明がつかない。

卑見によって説明を試みると、はじめの「すみよしのわたりをこぎゆく」は舟が「住吉郡」の海岸にさしかかってきたということである。そして「すみの江」に近くなり、「すみの江にふねさしよせよ」となるのである。一行は「すみの江」に一泊して、「六日、みをつくしのもとよりいでて、なにはにつきて」となる。これは翌六日に「すみの江」を出航してその日のうちに難波津に到着した、ということである。

「みをつくし」は航路標識の杭である。『延喜式』卷五十、雜式に

凡難波津頭海中立濤標。若有旧標汚折。搜索拔去。

とあり、難波津の象徴として歌にもよまれるものであるが、しかし、それが難波津にだけしかないものと考えては速断になる。航路標識は必要な場所（例えば港）には必要になる筈のものである。今の場合は「すみのえ」の「みをつくし」と考えなければ文意が通らない。『土佐日記』の注釈書では「みをつくし」を難波津のものと固定して考えたため、この部分の理解に混乱したものがある。「すみのえ」の「みをつくし」は次の例だけで充分

拙論は「すみのえ」と「すみよし」の両語について、『万葉集』の説明から離れて平安時代の作品について歌学書を手引きとして検討したものである。

『八雲御抄』の巻第五、名所部をみると、「すみのえ」の語は入江と解される「江」の部に入り、「すみよし」の語は「社」「浦」「里」「浜」の部に入っている。「すみの江」は文字通り「入江」の意味であり、「すみよし」は右のそれぞれの箇所で示されるごとく、『和名抄』の郡名からの派生として理解される。平安文学における両語の相異はその内容によっているのである。だから当然に併存するわけである。

この理解の仕方は藤原清輔の『和歌初学抄』も同様である。さかのぼって『能因歌枕』の「国々所々名」の攝津国の項を見ると、「すみの江」と「すみよし」とを別々に並べて記載している。證歌を豊富に掲載した『五代集歌枕』も「江」の項に「すみのえ」を入れ、「すみよし」は社・浜・岸・里の項に入れる。ゆえに歌学書の理解は「すみのえ」は入江であり、「すみよし」は社であり、郡名である。それが平安朝を通じての理解の仕方と認められる。それは決して同義語ではないし、また「すみのえ」が特に古語的なニュアンスを帯びているわけでもない。それぞれ別の内容を持った別の語である。（『歌枕』一四〇頁）

以上の歌学書の理解は具体的に作品にあたって検討してみると、その通り

になっている。それ故、歌学書の理解がそのまま妥当すると考えた。以上が前記拙論の骨子である。

拙論後半の三篇は「すみのえ」の位置を特定しようとしたものである。

「すみのえ」は『古事記』の「定墨江之津」にしても、それは港がひらかれたことであり、ここが奈良・平安時代には西海道及び海外諸国に往来する船舶の重要な港であった。それをただ今詳説するいとまはないが、その必要もなからう。それはあまりにも著名なことである。必要なことは「すみのえ」は全く自然のままの入江であるのみならず、相当人工の加わった構築物でもある、ということである。

「すみのえ」が入江、港であるとなると、一方「すみよし」は郡名である。『和名抄』は勿論であるが、『伊勢物語』六十八段に

すみよしのこほりすみよしのさとすみよしのはまをゆくに、

とある。これも明白な例である。「すみのえ」「すみよし」が別のものであることは決定的な事実である。

さらに具体的にしようとするならば、「すみのえ」の位置が特定されねばならない。でないと、語義を考えるにしても、実作を吟味するにしても、甚だ心もとないことになってしまう。

「すみのえ」の位置は拙著『歌枕』の、特に一四五頁以下、又、「すみよしの浅沢小野」「いでみの浜」の章に記したので、今は繰返す必要はないと

○すみの江 攝津国住吉郡。今の住吉神社のある所。古事記仁徳天皇の條に『又定 墨江之津』と見え、万葉集には、住吉、墨江、墨之江、優美乃延など書き、奈良時代までは、必ずすみのえとのみだった。この集中に「住よしとあまは告ぐとも云云」。又、和名抄に「攝津国住吉、須三与之郡などあるので見ると、既に延喜以前から、文字について唱え謬ってきた事が知られる。古くは吉愛通用して、皆エと訓ませている。

とし、又、九〇六番の注には

○住吉 住の江と同じい。攝津国住吉郡(今東成郡)。吉の古訓はエであるから、住吉と書いても、なお「スミノエ」と訓むべきを、夙くこの頃は「スミヨシ」と訓むことが起つてゐたのである。下にも「住よしと蟻はつぐとも長居すな」とある。

とする。要するに、その主旨は元来「スミノエ」という一語のみが存在していたのに、それが二語のようになったのは「延喜以前から文字について唱え謬ってきた」ものだ、という説明である。即ち、「スミノエ」の語を「住吉」と記すようになり、それを「スミヨシ」と訓んでしまったため、「スミノエ」の語のほかに「スミヨシ」という語を発生させてしまった、という説明である。その時期は奈良時代ではなくて、つぎの「延喜以前」と考

えているのである。

しかし、これでは発生の説明にはなるが、平安時代における両語併存の説明にはなりがたい。

窪田空徳『古今和歌集評釈』の三六〇番の注には

すみのえの。「すみのえ」は攝津国住吉郡で、今の大阪市の住吉神社のある所。古くは「すみの江」といつたが、この当時は「住吉」に転じていたらしい。いまは古い名によつたと見える。

とする。

ここでは発生論的には金子氏と同じく、歌としては「すみのえ」が古語的ニュアンスを帯びて使用されていて、「すみよし」は当時の普通語として使われている、という説明とうけとれる。そうすると、やや説明不足と言わねばなくなる。即ち、この場所で何故古い言葉によらねばならなかったのか、ということについての説明が無いことになる。

金子・窪田両氏の説明方法は基本的には同内容のものであって、それは平安朝文学の「すみのえ」「すみよし」の両語の注釈にひろく用いられている説である。ただ、よく考えてみれば、この説明方法は古くから『万葉集』の注釈家が、その「住吉」の語に対して用いてきた伝統的説明方法であつて、それがそのまま『古今集』の注釈に転用されているのである。

「すみのえ」と「すみよし」(1)

奥村恒哉

「すみのえ」と「すみよし」の両語については、かつて卑見を述べたことがある。平凡社撰書52『歌枕』（一九七七年四月刊）においてである。その第二部第五章「すみのえとすみよし——一般に同語とされる両歌枕の併存の根拠」がそれである。その前半は「すみのえとすみよし」として『国語国文』（昭和四十一年五月号）に載ったのが初出である。後半の「すみよしのとほさと小野」「すみよしのあさは小野」「いでみの浜」の三篇は前半を補い、かつ裏付けるものである。東京堂『源氏物語事典』（池田亀鑑編、昭和三十五年五月刊）の「すみのえ」及び「すみよし」の項にはその骨子を記した。

筆者の見解は、『源氏物語事典』以来『歌枕』にいたるまで変化していない。この筆者の見解に対して、片桐洋一氏は『歌枕歌ことば辞典』（角川小辞典35、昭和五十八年十二月刊）において、反対の意見を表明された。拝見して筆者は筆者の見解を変更する必要をみとめなかった。そこで改めて筆者には片桐氏の異見を参照しながら筆者の見解を述べる必要が発生した。

二、筆者の見解の要旨

平安時代における「すみのえ」「すみよし」の両語についての従来の見解、及びそれに対する筆者の見解を簡単に総括することからはじめようと思う。

従来の見解はこの両語を単純に同義語、及至同語と理解して説明してきた。両者に差があるとすれば、「すみのえ」が古語、「すみよし」が当時の普通語であるとして理解すべきだ、という扱い方であった。しかし、こういう方法では説明不可能なものが残る、というのが筆者の見解のモチーフである。

即ち、『古今集』では「すみのえ」「すみよし」の両語が併存する。もし、「すみのえ」「すみよし」が同語であるとすれば、このような現象はあり得ない筈である。さらに、『後撰集』以降の勅撰集にも並び使用され、『土佐日記』『源氏物語』などの散文作品においても同様である。「すみのえ」が古語的ニュアンスを帯びていて、「すみよし」が新しいニュアンスを帯びていると説明したところで、それが『万葉集』から発して『古今集』『土佐日記』を経て、『新古今集』にいたるまで連綿と使用されているのであるから、特に古語的ニュアンスを強調するのも不自然なことである。

そこで、諸作品のうち最も詳しい注釈を有している『古今集』から例を採って問題の緒を得たい、と考えた。金子元臣『古今和歌集評釈』の三六〇番の注をあげる。